国際研究論叢　33（3）：169～178，2020

教育相談における今日的課題
―現職教員等に対する記述調査を通して―

胡　田　裕　教*

Current Issues in Educational Counseling:
Through Descriptive Surveys for in-Service Teachers

Hiroyuki Ebita*

Abstract

This study analyzes the awareness of problems in educational counseling based on a description survey conducted in the training for in-service teachers. It aims to clarify the current state and issues of educational counseling in schools. For the analysis, text data mining KH Coder can be used to create a co-occurrence network and visualize the relationship between words and their relationships. It was found that words that have a strong relationship with other words and are considered important are: *relationship*, *student*, *collaboration*, *work*, *living*, *trust*, *do*, and *aim*.

As a result, it became clear that *student understanding* and *cooperation* are issues as teachers aim to foster children to live better. In future, it is necessary to clarify theoretically the question of why *student understanding* and *cooperation* are important.

キーワード

学校教育相談、教員研修、生きる、児童生徒理解、連携

Ⅰ．問題の所在と背景

知識基盤社会と言われる時代が到来し、現代社会は常に新しい課題に対応していくことが求められるようになった。どこにいても情報のやり取りが瞬時にしてできるグローバルな世界が成立する中、AI（人工知能）の発達などにより今後、人間に代わって人工知能を活用することで消失する職業が出現するとも言われている。こうした世の中の動向は学校教育にも大きな影響を及ぼすようになった。学校の教師にはそのような世界に次代を担

＊えびた　ひろゆき：大阪国際大学国際教養学部非常勤講師〈2019.12.6受理〉

う子どもたちを送り出し、その中で生き抜くための資質・能力を育成することが求められている。これらの状況下で、子供たちに対して教師の取るべき指針について端的に示したものが新しい学習指導要領（小・中学校は平成29年告示、高等学校は平成30年告示）であろう。それぞれの第１章 総則における第４ 児童（生徒）の発達の支援の１ の（１）、並びに第５款 生徒の発達の支援の１の（１）において、次のように書かれている。「学習や生活の基盤として、教師と児童（生徒）との信頼関係及び生徒相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること。また、主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の児童（生徒）の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方により、児童（生徒）の発達を支援すること」。つまり、子どもたちの発達を踏まえながら、集団におけるガイダンスと個々の実態を踏まえたカウンセリングの重要性が指摘されている。このことが、「児童（生徒）の発達の支援」の項目の最初に記述されていることより、現代社会に生き抜く子どもたちに対して、教師が行う様々な教育活動の根底にガイダンスとカウンセリングの機能を発揮することが教師には求められていることがわかる。これらに対応する領域は主に「生徒指導」と「教育相談」の機能に含まれるといえよう。文部科学省（2010）の生徒指導提要では、これら２つについての相違点の説明と関係について、次のように説明している。「教育相談は主に個に焦点を当て、面接や演習を通して個の内面の変容を図ろうとするのに対して、生徒指導は主に集団に焦点を当て、行事や特別活動などにおいて、集団としての成果や変容を目指し、結果として個の変容に至るところにあります。」「教育相談と生徒指導は重なるところも多くありますが、教育相談は、生徒指導の一環として位置付けられるものであり、その中心的な役割を担うものといえます。」としている。つまり、生徒指導と教育相談は異なる機能ではなく、生徒指導の中心的となるものが教育相談の機能であるとしている。そのように考えると、教育活動の根底をなすとされる教育相談の役割は大きいといえる。本研究では、現代を生きる子どもたちにとって重要な位置付けとなる教育相談に目を向け、現職を中心とした教員研修の中で実施した記述調査に基づきながら、教育相談において抱く問題意識について分析し、学校現場における教育相談の現状とそこに内在する課題について明らかにすることを目的とする。

教育相談を扱った教員研修についての先行研究としてはたくさん存在する。例えば、和井田（2009）は、学校教育相談における教員研修が時代とともに変化する様子を小泉英二の業績から変遷として捉え確認している。島田（2018）では、教育相談研修のあり方について言及し、春日（2016）、金山・中川（2016a，2016b）では、実施された教員研修そのものの効果検証を行っている。また、森（2016）では、教員の能力開発を中心とした実践的な研修が示されている。これらに対して本研究は、教員研修を行う中、教育相談の発展に対する現職教員の思いを通して教育相談の今日的課題を見いだそうとするところに特徴を有する。

教育相談に関しては、もともと、戦前・戦中の日本における職業指導の方法として始められた。それは、職業選択や進路相談に対する社会的需要の高まりと深く関係していた。その後、職業指導が学校教育に導入され、ガイダンスとしての生徒指導も導入され、そし

て、幾多の変遷を得て、教師にはカウンセリングマインドを求められるようになり、スクールカウンセラーやスクールソーシャワーカーなどの専門家が学校教育に導入される教育施策がとられるようになった（広木，2019）。今日の教育相談については、治療的教育相談、予防的教育相談、開発的教育相談の３つに分類され、その担い手も、都道府県や市町村などの専門機関の教育相談担当者、前述したスクールカウンセラー（SC）、スクールソーシャルワーカー（SSW）、そして、教育相談担当教員、学級・ホームルーム担任を中心とする一般教員に分けられる（会沢，2019）。そのことからも、教育相談には、心理臨床分野の専門家が行う「教育相談」と学校の教師が行う「学校教育相談」の２つが含まれる。栗原（2002）では、「『学校教育相談』という言葉は、学校における教育相談であること、あるいは学校における相談活動であることをもっと自覚した実践を創造していくことが必要であるという意識に基づいて用いられるようになった」としている。本研究における教育相談とは、主に後者である学校教員が自覚をもって実践する「学校教育相談」を中心とした文脈で取り扱った。

Ⅱ．研究方法

Ⅱ－１．調査時期及び調査対象

201X年度に、教育相談というテーマで４講義時間（90分×４）を１日の中で教員研修を実施した。参加者は、現職を中心とした教員81名で、年齢的に経験の浅い層からベテラン層までさまざまな層の教員で構成されていた。記述調査に関しては、教員研修受講後に実施した。

Ⅱ－２．調査内容

記述調査の内容は、「講義内容（個人ワーク、ペアワーク等を含む）を踏まえ、教育相談並びにその発展に大切なこととはどのようなことだと思いますか。ご自身の教育実践ともからめながら多角的、多面的に書いてください。また、記述した文章に自分なりにタイトルを付けてください。」という質問項目の中の、「記述した文章に自分なりにタイトルを付ける」という部分について注目した。自己の記述した内容に対してタイトルを付けることで、記述の中で、一番大切にしたいことやどうしても伝えたいことなどの個人の強い思いがそこに表出されることになる。そこに、現在の教育相談における現状と課題が表れてくると考えられる。本研究では、テキストデータマイニングを使用して分析することにする。

Ⅱ－３．講義について（その全体像と背景）

講義内容について示したものが表１である。時間ごとの講義テーマとしては、①教育相談の歴史と論争、②教育相談の対象と生徒指導との関係、③教育相談の方法、④教育相談と連携・協働で構成されている。表の右端は、それぞれの上部が該当時間で扱った項目を示し、下部が実施したワークについて示した。個人ワークは与えられたテーマについて１人で考えるワークのことで、ペアワークは個人で考えたことを基本２人による対話を通し

て共有し学び合うワークのこと。そして、グループワークは１人で考えたことを基本４人による話し合いを通して共有し学び合うワークのことである。個人ワークは８回（１限目１回、２限目３回、３限目３回、４限目１回)、ペアワークは３回（１限目１回、２限目０回、３限目１回、４限目１回)、グループワークは２回（１限目０回、２限目１回、３限目１回、４限目０回）の機会を設け実施した。

表１　講義テーマと項目等

	講義テーマ	項目とワーク
１限目	教育相談の歴史と論争	①教育相談とは　②高等教育の拡大　③歴史－そのはじまり、1950年代から1960年代、1970年代から1980年代中期、1980年代後半から1990年代後半、2000年代から現在　④それぞれの区分での教育相談の特徴と論争１～４　⑤自身の教育相談活動の特徴
		⑤において自身の教育相談活動の特徴を考える個人ワークとペアワークを実施
２限目	教育相談の対象と生徒指導との関係	①学校における教育相談の特質　②教育相談の種類　③自身の教育相談の経験　④教育相談の事象　⑤いじめ－認知件数の推移、定義の変遷、その構造、学年別発生件数、その様態、「いじめられている君へ」　⑥不登校－その定義、きっかけとなった背景、その対応　⑦自身の教育実践を振り返る　⑧生徒指導－その位置づけ、生活指導とは？、その意義と発展過程、生徒指導とは？、自己実現の過程、指導体制、初任者の悩みの傾向、事実に即して叱る、ほめる１～２、そもそも指導って何？
		①において学校で行う教育相談の特質を市町村などの教育センターなどの専門機関で行う教育相談と比較して長所や短所から考える個人ワークを実施　③において自身が携わった教育相談の経験からその事象について考える個人ワークを実施　⑦において　１．最近の動向　２．勤務校の個人、学年、コース、学校としての取り組みやシステム、効果的な方法、問題点、指導体制　３．教師として経験したことなどについて自身の教育実践を振り返る個人ワークとグループワークを実施
３限目	教育相談の方法	①教育相談の方法とその目的　②児童生徒理解－その前提、２つの側面、その内容　③教育相談の方法－アセスメント、カウンセリング、心理教育、コンサルテーション　④教育相談で使われる具体的技法　⑤観察法・面接法・調査法の長所と短所　⑥これからの児童生徒理解　⑦認知バイアス　⑧認知バイアスの主な例　⑨自身の認知バイアスの傾向　⑩データから見る日本の子どもたちの自己肯定感（自尊感情）１～３　⑪自尊感情と自己有用感　⑫自尊感情の考え方と問題点　⑬希望と時間的展望との関係　⑭絵本『おこだてませんように』から学ぶ
		⑤において観察法・面接法・調査法の長所と短所を考える個人ワークとペアワークを実施　⑨において自身の認知バイアスの傾向を考える個人ワークを実施　⑭において主人公の少年がすこやかに生きていくことができるためには教員としてどのような関わりや支援をすればよいかについて考える個人ワークとグループワークを実施

4限目	教育相談と連携・協働	①学校教育相談の構造　②教育相談の連携・協働　③組織的対応の進め方　④生徒指導上の課題解決のための「チーム学校」　⑤同じ言葉を使っていても…　⑥教員同士のつながり　⑦社会資源とのつながり　⑧つながる意識と同僚性　⑨教育相談の今後のゆくえ（見通しと見極め）
		⑤において、チーム学校による教員、SC、SSWの間で同じ言葉を使っていても、言葉のニュアンスが異なる可能性があるものとして、どのような用語があるかを考える個人ワークとペアワークを実施

講義の進め方については、それぞれのワークを多用した。特に、ペアワークとグループワークについてはその機会を意識的に多く作った。これは、教員に対する研修という特別な特徴を有する性質に影響している。つまり、現在、職業として行っている自身の教育活動を見つめ直すという意味で、生涯教育に位置する領域の研修であるといえる。この部分が大学の学部生に対する講義と決定的に異なる点である。そこで、講義を実施する上で視座としたのは、M.S.ノールズのアンドラゴジーという概念である。アンドラゴジーとは、平川（2014）によると、「教育学を示す『ペダゴジー』は、ギリシャ語でpaid（子ども）とagogus（指導者やリーダー）という言葉からなる合成語で、ノールズは『子どもを教える技術と科学』と定義し、これにたいして『アンドラゴジー』は同じくギリシャ語のaner（成人）とagogusをあわせた言葉で「成人を支援する技術と科学」としている。すなわち、それまで教育が子どもに対する営みであるととらえられてきたことに対して、成人の教育論ないし学習論が成立することを示したものである」とし、「おとなの学びは、過去の自らの経験にもとづいて、学習を主体的に、自己決定的に展開していくことに特徴がある」と説明している。ペダゴジーとアンドラゴジーの比較について、ノールズ（2002）は、５つの項目を挙げている。①学習者の概念、②学習者の経験の役割、③学習へのレディネス、④学習への方向づけ、⑤学習への動機づけであり、ここに両者の異なる点を見いだした。つまり、アンドラゴジーは、自己決定的で、経験が学習資源となり、生活上の課題から芽生えたもので、課題達成が中心で、内的な誘因から生じるものとされている。

以上のことより、講義において特に注意を払ったことは、①経験を資源にすること、②自己決定的で自己評価を重んじること、③硬直化した思考の「解凍」である。その上で、問題解決及び、新たな問いを見いだす機会を提示することであった。

Ⅲ．研究結果

教員研修の参加者は、現職を中心とした教員81名であったが、前述の記述調査内容の質問項目について回答する中で、４名の参加者がタイトルを付け忘れたことより、合計77名の記述を基にして分析することにした。77名の属性の内訳を示したものが表２である。中学校と高等学校の教員が全体のそれぞれ30％以上を占め、続いて小学校の教員が20％近くを占めた。つまり、小学校、中学校、高等学校の教員で80％を占める構成であった。

表２　分析対象者（77名）の属性

性別	人数	（%）	所属	人数	（%）
男性	32	41.6	幼稚園・保育園	（幼3・保3）　6	7.8
			小学校	15	19.4
			中学校	24	31.2
女性	45	58.4	高等学校	24	31.2
			教育委員会等	8	10.4
			合計	77	100.0

表３　所属別タイトル一覧

通し	タイトル	所属	通し	タイトル	所属
1	幼稚園の教育相談とマイルール	幼稚園・保育園	40	共感的関係と連携、協働の大切さ	中学校
2	より良い幼稚園教諭になるために		41	教育相談と信頼	
3	子どものこころに寄り添う教師		42	寄り添える教員を目指して	
4	認め合える人間になること		43	自己肯定感の向上を目指して	
5	教育相談をする上で大切にしたいこと		44	教育相談員として	
6	子どもたちがよりよく、いきいきと生きていくために		45	教員が誰でもどこでも行うことができる教育相談	
7	教育相談に必要な信頼関係と連携と協働	小学校	46	開発的教育相談活動に重きを!!あと最低限の環境整備があった上で	高等学校
8	特別支援教育で身に付けた学びを教育相談へ!!		47	自己有用感を育むことの大切さについて	
9	教育現場における関わり方		48	教育相談の発展に向けて	
10	子どもによりそう教育相談		49	複雑化する教育相談への対策	
11	共感と連携		50	教育相談の在り方	
12	お互いに良さを認め合うこと		51	心と言葉の通じ合い	
13	よりよく生きる子の育成を目指して		52	「今」と「一人一人」を大切に	
14	広い視野で		53	教育相談の手法の学びと実情把握	
15	教師理解もしてもらうことで		54	教育相談の必要性	
16	つながりの中で生きる		55	生徒理解と信頼関係	
17	児童生徒、保護者を理解し受けとめる		56	「一人のために全員で」	
18	図書館司書としての教育相談		57	今後の教育相談の取りくみ	
19	養護教諭としてできること		58	本日の講義から学んだこと	
20	教育相談並びにその発展に大切なこと		59	“教育相談”と“協働”	
21	教育相談について思うこと		60	生徒指導の本質である教育相談	
22	教育相談はチーム力が大切	中学校	61	ほめること	
23	日常対話からの教育相談		62	他教員と連携した教育相談を目指して	
24	特質をいかしたチームとしての連携		63	教育相談の多様化について	
25	自尊感情を高める教育相談		64	時代の変化が教育相談の変化	
26	不登校生徒との関わり方について		65	連携の大切さ	
27	その子のきもち		66	児童生徒を理解すること	
28	生徒の成長のために		67	連携と協働の重要性	
29	適した方法を選びチームとして取り組む		68	児童生徒のためになる意味ある教育相談を行うには	
30	つながりの中で子どもを育てるために～私にできること～		69	子どもが「よりよく生きるために」私たちがすべきこと	
31	強く生きる力を育むための協同で行う教育相談の在り方		70	児童・生徒理解と社会とのつながり作り	教育委員会等
32	ヒアリング		71	自己肯定感を育てる	
33	信頼関係の大切さ		72	児童生徒理解に基づいた信頼関係	
34	子ども達の未来のために		73	今の自分にできること	
35	生徒理解を基盤とした教育相談		74	より確かな「チーム学校」を目指して	
36	生徒の心を育てる本当の指導		75	人材育成と社会貢献のあり方	
37	生徒の個性を生かす教育相談		76	教育相談と子どもとの関わり	
38	教育相談の重要性		77	生徒理解と教育相談	
39	「教育相談」を知るということの価値				

次に、分析対象者全員のタイトルを所属別に示したものが表３である。

次に、教育相談並びにその発展に大切なことに対する記述に付けたタイトルについて、テキストマイニングソフトKH Coder 3の共起ネットワークコマンドを用いて分析した。「共起ネットワーク」とは、共起の程度が強い語を線で結んだネットワークで、強い共起関係ほど濃い線で描画できたり、出現数の多い語ほど大きい円で描画できたりする（樋口，2014）特徴をもつ。KH Coderの共起ネットワークコマンドを用いて語と語のつながりや関連する程度を可視化したものが図１である。また、タイトルに示された語を抽出語として出現順に示したものが図２である。ここでは、３回以上の頻度で出現した語のみを取り上げた。

図１では、大きく２つに分かれ、そのうちの左側の大きなかたまりについて、〈教育〉、〈相談〉が〈生徒〉を媒介として広がっていることがわかる。また、直接関連している語が多いものとして、〈関係〉が８本、〈生徒〉が７本、〈連携〉、〈働〉、〈生きる〉がそれぞれ６本、〈信頼〉、〈行う〉、〈目指す〉がそれぞれ５本を確認することができる。これらの語を中心とした結びつきが展開されているといえる。中でも、〈生徒〉、〈児童〉、〈理解〉の相関が強いことがわかる。これが、「児童生徒理解」につながる。また、表４は、語の

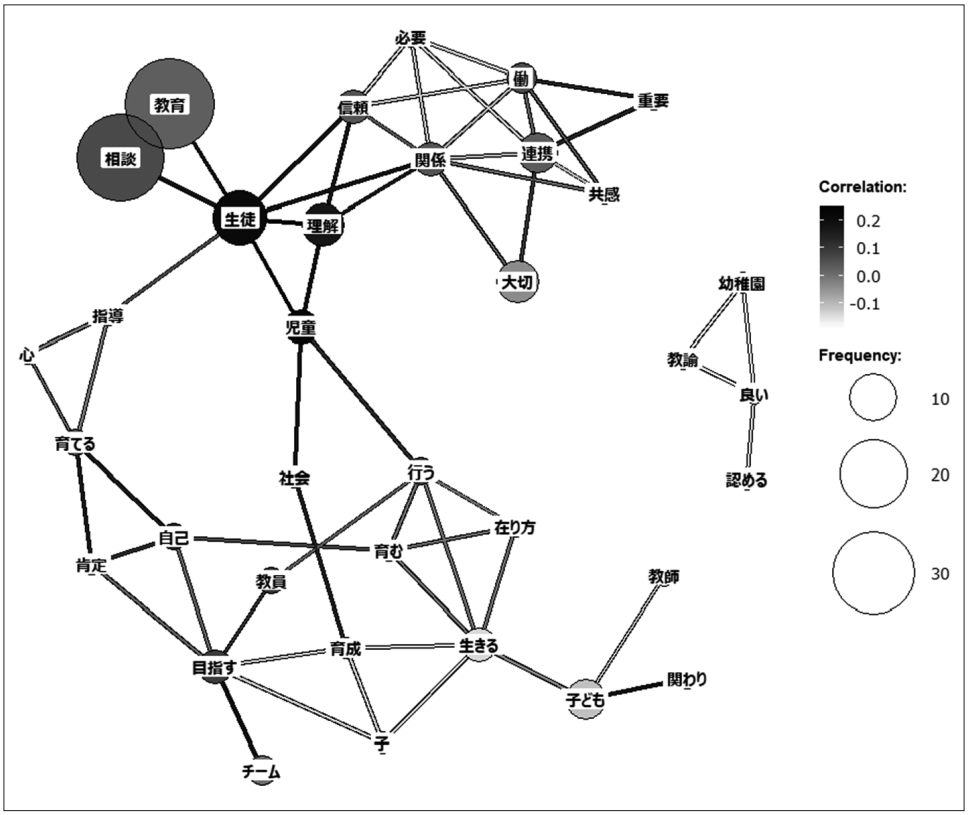
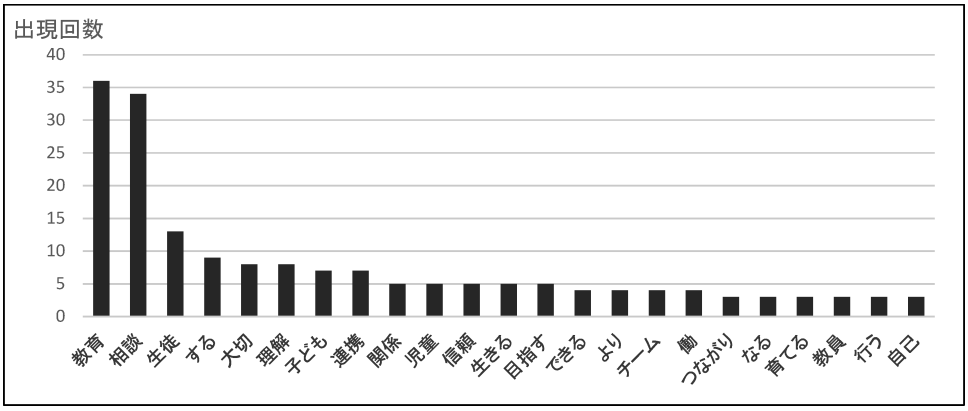


図１　全体のタイトルの共起ネットワーク

表４　全体のタイトルの抽出語と出現回数（３回以上）



出現回数を多い順に示したものである。したがって、図１を補完する位置づけとして捉えることができる。多く出現している語は、〈教育〉が36回、〈相談〉が34回、〈生徒〉が13回、〈する〉が９回、〈大切〉、〈理解〉がそれぞれ８回、〈子ども〉、〈連携〉がそれぞれ７回、〈関係〉、〈児童〉、〈信頼〉、〈生きる〉、〈目指す〉がそれぞれ５回などを確認することができる。

Ⅳ．考察

研究方法の中で、筆者は、「教育相談並びにその発展に大切なことについて記述した文章にタイトルを付けることで、一番大切にしたいことやどうしても伝えたいことなどの個人の強い思いがそこに表出される」ということを書いたが、その個人の強い思いを表した語こそ、研究結果で示した〈関係〉、〈生徒〉、〈連携〉、〈働〉、〈生きる〉、〈信頼〉、〈行う〉、〈目指す〉といった語なのではないか。これらの語は、他の語とも直接関連している鍵となる語である。図１より、これらの語を筆者なりにつなげてみると、「児童生徒理解」を一番大切にしたいという思いがあることがわかる。また、それを成立させるためには「信頼関係」が必要になる。また、「関係性」を成立させるためには、「連携することの重要性」に気づくことが大切である。これらの部分が課題であると考えらえる。一方、よりよく「生きる」ことについて教員がその育成を「目指す」ということは、教員の目標を示していることになるだろう。だだし、その目標に向かって歩んでいこうとする期待感も同時にうかがえる。目標に向かう中で、課題に対応していこうとする思いがこれらに表れていよう。

ここで、大切なことは、児童生徒がよりよく「生きる」ための「児童生徒理解」や「連携の重要性」であっても、教員も知識基盤社会の中で主体として生きていけねばならないこと。そして、児童生徒理解のためには、教員が自身の正しい自己理解をしておかなければならないこと。それとは逆に、教師は学内、保護者、外部機関等に連携することが重要であるが、児童生徒も連携する意識を持つことが求められている。それらの視点は忘れら

れてはいけない。

研究結果で得られた知見について、講義内容と研究結果の関係という観点から考えてみたい。講義の中で取り扱った項目と研究結果として得られた知見と重なる箇所は存在する。したがって、まったく無関係ではないかもしれない。とはいえ、本研究で得られた結果は、受講者同士お互いが、自己の経験を資源にして他者に対して学習の機会を与え、新たな気づきを得た中から生じた結果である。つまり、講義の内容は学習のきっかけにはなるが、そこから先は、他者からの学びを融合して、受講者個々の自己評価に落とし込み、生成されたものである。したがって、学校の教育現場で行われている現状と課題がそこに溢れていると考えてもよいだろう。

Ⅴ．まとめと展望

本研究の目的は、現代を生きる子どもたちにとって重要な位置付けとなる教育相談に目を向け、現職を中心とした教員研修の中で実施した記述調査に基づきながら、教育相談において抱く問題意識について分析し、学校現場における教育相談の現状とそこに内在する課題について明らかにすることであった。分析の結果、児童生徒がよりよく生きることができるように育成することを教師が目指すという目標に向かう中、「児童生徒理解」や「連携することの重要性」が課題になっていることが明らかになった。現代においては、社会との関わりの中で、自分がどのようにして生きていくことができるのかという問いに答えることができるような教育が必要になってきた。そのためには、「児童生徒理解」をその構造から見つめ直す中で、児童生徒の自己理解とともに、教師自らの自己理解も重要になってくる。また、「連携」することについては、現在社会を生き抜くためにも、また学校教育を円滑に行うためにも教師並びに児童生徒ともに重要になってくる。まさに、今日的課題である。

本研究において、当初の目的は一定程度果たせたのではないかと考える。しかしながら、以下のような問題点も残された。可視化図から研究結果をある程度読み解くことは可能である。しかし、読み解く人物によって差異が生じるのではないかという点である。本研究の分析にはKH Coderを用いたが、KH Coderを用いるならば、妥当性の観点からより精度を上げるために複数の研究協力者に依頼し、それぞれの分析を統合するような作業が必要になるのかもしれない。次に、展望として、本研究では受講者全員の動向しか分析できなかったが、今後、教員研修を重ねることで校種別の動向が明らかになるかもしれない。また、「児童生徒理解」、「連携」については、なぜ重要なのかという問いに対して深く追究し、理論的に明らかにする必要がある。今後の発展的課題としたい。

参考・引用文献

会沢信彦（2019）「第Ⅰ部 教育相談の基礎　第１章 教育相談の理解」高柳真人・前田基成・服部環・吉田武男（編）『MINERVAはじめて学ぶ教職 教育相談』ミネルヴァ書房，pp.3-16

樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版

平川景子（2014）「第３部 成人学習論の展開」小林繁・片岡了・平川景子（著）『生涯学習概論 改訂

版 学びあうコミュニティにむけて』エイデル研究所，pp.110-157
広木克之（2019）「第１章 教育相談の歴史と変遷」春日井敏之・渡邉照美（編）『新しい教職教育講座 教職教育編⑫ 教育相談』ミネルヴァ書房，pp.1-18
金山元春・中川真身（2016a）「教員のリソースを喚起する教育相談研修の試み」『教育カウンセリング研究』第７巻（1） pp.59-68
金山元春・中川真身（2016b）「教員のリソースを喚起し自己効力感を促す教育相談研修」『高知大学教育実践研究』第30巻 pp.115-122
春日由美（2016）「教師の教育相談的資質向上研修における効果研究」『南九州大学人間発達研究』第６巻 pp.63-70
栗原慎二（2002）『新しい学校教育相談の在り方と進め方－教育相談係の役割と活動－』ほんの森出版
文部科学省（2010）『生徒指導提要』教育図書
文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成29年告示）」
文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成29年告示）」
文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」
森正樹（2016）「教師の教育相談技能を開発する実践的研修」『埼玉県立大学紀要』第18巻 pp.41-49
ノールズ，M（2002）『成人教育の現代的実践：ペダゴジーからアンドラゴジーへ』堀薫夫・三輪健二（監訳）鳳書房
島田香（2018）「スクールカウンセラーの専門性を活かした教育相談研修のあり方について」『学校メンタルヘルス』第21巻（2） pp.202-209
和井田節子（2009）「学校教育相談に関する教員研修の変遷－小泉英二の業績を中心に－」『名古屋女子大学紀要』第55巻（人・社） pp.183-195